

仏の願い

平成 25 年 西雲寺だより 早春号 (30 号)



春、三月が近いとはい
え、寒さ一段と厳しいな
か、境内の白モクレンの
つぼみが大きくなってい
るのに気付いた。寒さの
中に縮んでいた私のいの
ちが何かホツとするのを
感じる。境内には市の文
化財に指定された三本の
枝垂れ桜があるが、その
中の一本の幹は空洞で薄
皮一枚でもっている状態
である。樹医さんによれ
ば、人間でいえば九十歳
以上で手当のしようがな
いという。しかしこの桜
が毎年一番花付きがよく
きれいに咲いてくれる。
老病死するいのちを生き
るのは人間だけでなく、
いのちあるものすべての
すがたである。しかし人
間だけが老病死するいの
ちに愚癡や文句をつける
のである。老病死するい
のちのままに美しい花を
咲かせる老木に恥じなけ
ればならない。(住職)

お内陣修復と

宗祖親鸞聖人七五〇回

御遠忌にあたって

昨年三月の世話方集会でご賛同いただきましたように、いよいよ来年四月二十七日に親鸞聖人の七五〇回御遠忌を勤めさせていただきます。それに先立ち、お内陣の修復のため、二月二日に世話方さんと武周の方々にお参りいただき、ご本尊を仏間へお移しする動座法要をつとめさせていただきました。七月の永代経まで、ご不便をおかけしますが仏間を仮の本堂とさせていただきます。

内陣は、以前いつ頃修復されたのか分かりませんが、ご本尊を安置するご宮殿の痛みが最もひどく、金箔がはがれ、黒ずんでいる箇所がかなりあり、また土台の部分に虫くいが見られます。また正面の欄間も色彩がはがれ、彫刻も部分的に欠落しているところがありますので修復させていただきます。

お内陣について

お内陣はご本尊阿弥陀仏を安置するところですが、他宗とは大きな違いがあります。他宗のお内陣には金箔が張られていませんが、真宗のお内陣は金箔が張られ金色に光っています。それはお内陣は阿弥陀仏の浄土を表わし永遠に変わらない真実を表して



修復が終わったご本山のお内陣

いるのです。お浄土は阿弥陀仏の願心莊嚴の世界で阿弥陀仏のおところで莊嚴されている世界です。お莊嚴とは形のないものが私たち凡夫に見えるように形を表して下さったもので、私たちは内陣の輪灯や、おろ

うそくの光、またお香の香りやお花のいのちに手を合わせることによって阿弥陀仏のお慈悲や智慧にふれさせていただくのです。そしてもう一つ他宗との違いは、真宗のお内陣は私たちがお参りする外陣とは一段高くなっていることです。これは阿弥陀仏の浄土と私たち凡夫が住む娑婆世界との分限を示しているのです。私たちはどれだけ努力して頑張っても、この世が浄土になることはありませんし、ましてや私たち凡夫が仏になることもありません。私たちはこの分限をしっかりと自覚し、この迷いの娑婆に身を据えて、お浄土に真向かいになって、手を合わせ阿弥陀仏のご本願を聴聞させていただきますのです。私たちの先祖の方々、数百年前からこのお内陣に向かって手を合わせ仏法聴聞してこられたのです。そのような尊い歴史をもつお内陣を、今回ご遠忌に向けて修復させていただくことは、まことに意義深いものと思っております。

ご遠忌について

ご遠忌は五十年ごとに勤めさせていただきます。宗祖親鸞聖人のご法事であります。その

源を尋ねれば、親鸞聖人ご自身、師・法然上人のご命日に人々と寄り合い、お勤めをし、仏法を聴聞し、語り合ってきたことにあると思われます。親鸞聖人は生涯、日々に新しく感動をもって、法然上人のお説きになったお念仏の教えを聞いていかれましたが、それが法然上人のご命日である二十五日の集いであつたのです。そして親鸞聖人なき後、お弟子やお同行たちは、聖人のご命日である二十八日に寄り合いお勤めをし、仏法を聴聞し、語り合つていかれたのですが、それが「講」の始まりで、今日の浄土真宗の原点であります。そしてやがて聖人の祥月命日である十一月二十八日に報恩講をつとめて、聖人のご恩徳を偲び、ご法義を語り合い、お念仏を相続してきたのです。そして五十年毎の御遠忌がつとまるようになったのは、聖人滅後三百年頃といわれていきます。最近つとまったのは昭和三十六年、七百回御遠忌が各ご本山で盛大につとまり、京都の町は数百万人の参詣であふれ返つたといわれています。当寺におきましても昭和三十七年にご門主をお迎えして賑やかに勤めさせていただいたことです。

宗祖としての親鸞聖人

浄土真宗というのは、親鸞聖人が『大無量寿経』に説かれた本願念仏のみ教えにつけた名前であつて、一宗一派を表す名前ではありませんし、また、聖人も一宗一派を



ご本山での親鸞聖人 750 回
大遠忌（平成 23 年 5 月）

たてる意図は全くありませんでした。

では何故、親鸞聖人を浄土真宗を開かれた宗祖とお敬いするのでしょうか。それは親鸞聖人という方を一言で表すならば、浄土真宗という仏道を頭かにするために九十年という長い人生を捧げられたということ。そして浄土真宗と名づけた『大無量

寿経』に説かれた本願念仏のみ教えが一切の衆生を救う大乘仏教の中の至極であることを世の中に示し、後の世に残さんがために、あらゆる、経・論・釈の中からそれを証明するものを集めて『教行信証』六巻を完成させたことです。ここに、浄土真宗が成立し、親鸞聖人を宗祖と呼びするようになったのです。

浄土真宗のみ教えは、「お念仏申す人生を歩む」ということです。しかし、私たちはお念仏申すということが受け取れません。そんなことでたすかるとは思えないのです。しかし、この私がお念仏申すというところに、法蔵因位の願心がかげられ、十劫という長い時をかけて「我が名を称えてくれ」と願われ、呼びかけられています。お念仏申させていただく背後に働く如来の真実に目覚め、如来の恩徳を深くいただいでいかれたのが親鸞聖人でした。

私にとって御遠忌とは

私たちは親鸞聖人の七百五十回御遠忌がつとまるといつても、何かよそ事のように、自分と直接関係ないものと思つておられる方がおられるかも知れません。それでは一

生に一度遇われるか遇われなにかの大切な法要が一過性のイベントになってしまふ恐れがあります。私たちは御遠忌を迎えるに当って一人一人が聞法を通して、浄土真宗という私たち凡夫がたすかかっていく真実の親鸞聖人に遭遇させていただかねばなりません。そしてよき師、親鸞聖人のお導きの中に、お念仏申して生きることの深い恩徳の思いの中に、御遠忌をつとめさせていただきたいものがあります。

この御遠忌法要が、七百五十年の時を超えて、この現代という深い闇を抱えた時代を生きる私たちに、今現在説法して下さっている宗祖親鸞聖人に遭遇させていただく場となることを願ってやみません。

親鸞聖人に会う

親鸞聖人というとなかなか近寄り難い印象をもたれるかも知れませんが、聖人は一生愚か者と名告っていなかの人々と共に生きられた方です。親鸞聖人がご往生されて七百五十年たちましたが、聖人のおことはや生きざま、また味わわれた苦悩とおして、私たちはいつでも親鸞聖人にお会いすることができるのです。

その一つの例として、藤田ジャクリンさんをあげたいと思います。ジャクリンさんはフランスの方で少女時代パリの図書館で『歎異抄』に遭遇し深い感動をおぼえたのです。それは第二条の



西雲寺のお内陣(修復前)

念仏は、まことに浄土にうまるたねにてやはんべるらん。また地獄に落つべき業にやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり。たとい、法然上人にすかさされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさうろう

の部分です。

ここにはキリスト教では考えられない、

念仏における絶対的な純粹な信、また親鸞聖人と法然上人との師弟関係が語られています。このようなお言葉を語る親鸞おじさんとほどのような方なのか是非お会いしたいとアルバイトでお金をため、シベリヤ鉄道で日本へやって来られたのです。しかし親鸞おじさんは七百数十年前にお亡くなりになった方であると聞いて非常にがっかりされたそうです。しかし、ジャクリンさんはその後聞法に励み念仏者になっていかれました。東別院でお話しを聞かせていただきましたが、外国から来られた方が、これだけ真宗を理解しお念仏をいただいておられるのかと感動したことでした。

おわりに

この度の親鸞聖人七五〇回御遠忌は十年計画を立て、費用を積み立ててまいりましたが、十年は長すぎるといふご意見が出て三年繰り上げて勤めさせていたたくことになりました。その為、費用が不足するといふ問題が出てまいりましたので、お同行の皆様のご懇志のご協力をお願いする次第です。よろしく願います。(住職)



動座法要

(二月二日)

お御堂で最後のおつとめ



阿弥陀様と仏具を仏間へ移しました。
みなさん、マスクと手袋をつけています



七月の永代経まで、仏間が仮のお御堂です。

父親の三十三回忌を終えて恩を知る

先般、父親の三十三回忌の法要をいたしました。その折、参集されたお客様との話と、私の心の中の思いを、すこしながらと思ひペンを取りました。

父親は明治三十二年生まれで、先の大東亜戦争に参戦し、昭和十一年にシベリアに出兵し、何年か御国のために働き、怪我もなく無事退役して、その後は自宅にて農業に精を出しておりました。私が生まれたのは、昭和十六年です。学校を卒業してからは父の跡を継ぎ、農業に励んできました。私は若気の至りで粗相で早く終わらせて遊びに行くことばかりでした。そこで父親の一言「後で手直しをする様な仕事はするな、少々遅くなっても手直しをしなくても良い仕事をしろ」と怒られました。その時はそのことを気につけず聞き流していました。でも、その父親の言葉が頭の片隅にあり今日の日々も仕事に励んでおります。

前置きはこのくらいで、何が言いたいかというと色々な事で親の「恩」を感じているからです。私が今でも農業ができるのは先祖、両親の「御恩」だと思います。

私は坪谷の仏光寺派の道場の隣に住んでおります。それがご縁で門前の小僧で小さいころから毎朝お講屋番の人の上げられる「正信偈」で目が覚めていました。父曰く、「間違えてもよいから大きな声で言え」と何時

も教えてくれました。そのお陰で今ではお講様のお調子取りも出来る程になりました。これも「御恩」だと思います。

周りの皆様の「御恩」、家族の「恩」、女房の「恩」それがこの年になって少しずつ解るようになってきました。

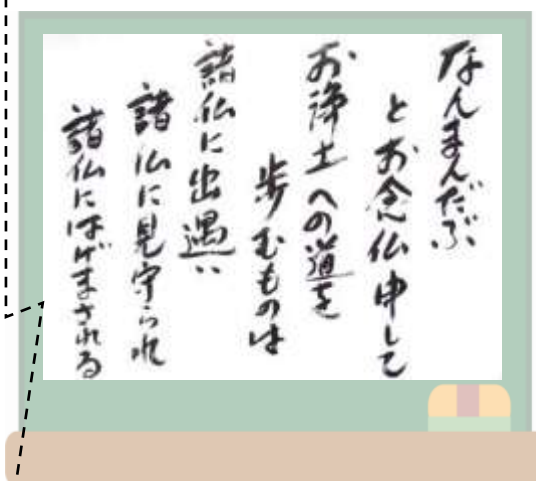
法要を終えて酒席の場で先輩の方々から「お前はなあ」という言葉を沢山もらいました。その言葉のうちには「ああ成る程なあ」と感じることもばかりです。その言葉を聞きながら、周りの皆様が陰になり日向になって教えていただいたことが、ひしひしと身にしみました。これが皆様方から与えられた「御恩だなあ」と心の底から思いました。己一人では何もできない者が周りの皆様の「御恩」家族の「御恩」が有るが故に生きる事が出来るのだとつくづく思いました。この「御恩」に報いるためにも増々精進して仏法も、己の人生も、又、周りの皆様にも家族も大切にして生きたいと思えます。

坪谷町

細川信行 (七十一才)



山門掲示板



私たちが人生を歩むということとは、そこにいろんな、苦しみや悩み、悲しみがありません。そのなかで私たちが一番悩まなければならぬのが人間関係ではないでしょうか。職場や友達関係もありますが、やはり家族間における人間関係でしょう。親子関係、夫婦関係、嫁姑関係です。うまくいっている時は幸せですが、一つ間違えと家族が憎しみの場となります。なかでも嫁姑の仲は永遠の問題といわれます。

しかし、このような人生における悩み苦しみがご縁となつて聞法の道を歩ませていただく時、人と人との関係のあり方が変わってくるのです。相手の人が変わるのではなく、関係のあり方が転ぜられていく、周りにいる人を自分を苦しめる存在としか見ることができなかつたところから、それなくして仏道に出遇うこともなければ、歩んでいくこともできなかつたということが、諸仏として出遇うということです。お念仏申していく世界は、周りの人を亡くなくなった先祖の方々を諸仏として見出していく広い世界なのです。(住職)

母ナツさんへ

私のひとり事

亡くなってから十七年もすぎやがて二十三年にもなります
 なぜか今あなたのことがよく思いうかんできます
 あなたは 自分の事は なりふりかまわず働き
 私たちや 人のためにつくしてきたように思います
 すこしは たのしいこともあったでしょう
 なんにも してあげられなかった私
 とてもくやんでなりません
 今は 佛さまになったばあちゃん
 あなたの ような 生きかたを少しでもと
 思っただけで できなかつた私
 あなたの ことを 思いありがたく
 自分のおろかさに 涙がでる思いでした
 でも 私は まだ あなたに 甘えたいです
 佛さまになった ばあちゃん
 私たちを見まもって下さい
 なまんたぶ
 なまんたぶ

芳子

修復作業が始まりました



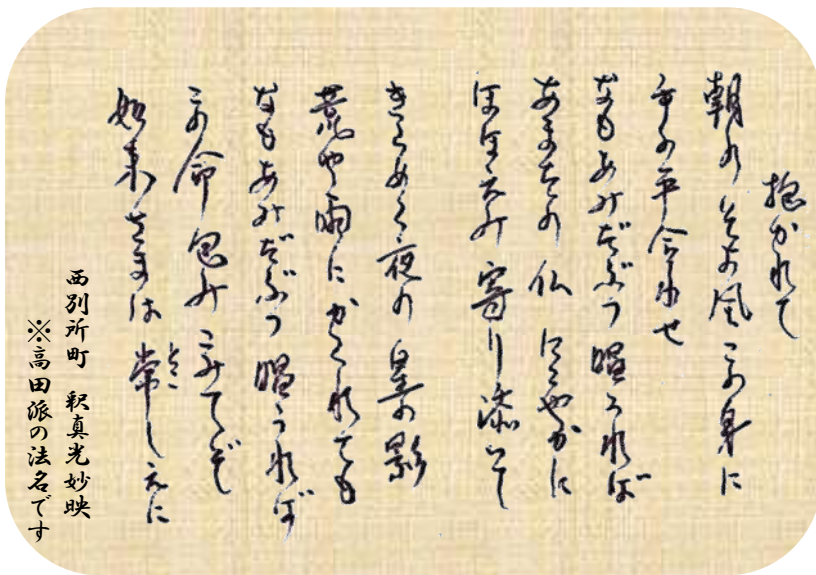
欄間も外されました。痛みが激しく、少しさわっただけでも細工がぼろぼろ取れてしまいます。



修復のため次々と運び出されました。大屋根は大きすぎて出せないため二分割されました。



永代経の頃、きれいになったお御堂でお参りする日が待ち遠しいです。



発行

真宗仏光寺派 専念山 ^{さい うん じ} 西雲寺
 住職 護城一寿
 筆頭総代 吉川芳弘
 編集責任者 護城一哉
 〒910-3523 福井市武周町5-2
 電話 0776-97-2138
 メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
 ホームページ http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞ
 ご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、
 ご感想など、どしどしお寄せ下さい。
 郵送でもメールでも構いません。お
 待ちしております。